人文書のすすめ

人文会創立50周年記念誌

考える力を養おう

内田 樹
宇野重規
大塚ひかり
川添 愛
木村草太
佐藤 優
出口治明
ブレイディみかこ
松岡正剛
若松英輔

人文会

代表幹事挨拶

みすず書房　田﨑洋幸

人文会創立五十周年記念誌をお手にとっていただきまして、誠にありがとうございます。素晴らしい先生方にご執筆いただいたことで、人文書を読む愉しさをお伝えすることができたかと思います。本冊子をきっかけに、ひとりでも多くの方々と読書の喜びを共有させていただければ幸いです。

人文会が活動を始めた頃、書店の店頭には人文書のコーナーが無かったといいます。当時は文学書の隣に何となく置かれていて全く存在感が無く、書店の方、読者の方に認知していただくためには、店頭でのコーナー展示が必須であると諸先輩方はお考えになったそうです。人文書がコーナー化されていることは、今でこそ当たり前になりましたが当時は悲願であり、そのご努力があって会員社が日々の出版活動を行うことができます。先達に深く感謝するとともに、次の五十年に向かって再スタートを切ったことは、現役世代として身が引き締まる思いであります。

今後も皆様にとって、人生を豊かにする人文書との出会いがあることを願ってやみません。我々がそのお手伝いをさせていただけるよう、人文会は活動を継続させて参ります。

人文会は一九六八年（昭和四十三年）十二月に創立され現在に至っています。

人文会の代表的な刊行物に「人文会ニュース」があります。年に数回発行する「業界向け」の冊子で、全国の図書館、書店に配布しています。本誌はその特別号となります。創立二十周年を迎えた一九八八年には、会員社の共同出版となった『人文科学の現在』を刊行しました。これが大変評判になったことから五年後に改訂版となる『人文書のすすめ』（一九九三年）を刊行することになり、以降、五年ごとに前作を踏襲する形で、『人文書のすすめⅡ』（一九九八年）、『人文書のすすめⅢ』（二〇〇三年）、『人文書のすすめⅣ』（二〇〇八年）を刊行いたしました。その後、二〇一一年に、「人文書販売の手引き」を発行し、書店の初心者から中級者向けの事務的なマニュアル本として利用され、二〇一五年に改訂版として第二版を発行しました。

その他にも、全国の書店との研修会、大学図書館、公共図書館の訪問、図書館総合展への出展など、積極的に活動を行っています。

「本と書店」をめぐる環境は、年ごとに厳しくなってきています。それらの環境を少しでも食い止め、読書のおもしろさを少しでも知っていただくために、本冊子を作りました。

どうぞ最終ページまでお読みくださるよう、お願い申し上げます。

わたしと人文書

内田　樹

というお題で「人文書との出会いや思い出」について書いて欲しいというご依頼を受けた。引き受けたはいいが、「人文書」という単語がどうも腑に落ちない。そういう言葉を使ったことがないからである。出版社とか取次とか図書館では頻用される語なのかも知れないが、それ以外のところでは使われていない(現に「じんぶんしょ」と打ってもＷｏｒｄは求める文字列には変換してくれない)。それだけなじまない語であるのは、たぶん、定義がはっきりしないからである。

かつて在職していた大学は「リベラルアーツ・カレッジ」を看板に掲げていたが、創立１００年を超すこの大学でも教員研修会ではしばしば「リベラルアーツとは何か?」が議論された。侃々諤々の議論がなされるのだが、いつも結論を得ないまま片付かない顔で私たちは帰途に就いた。大学の基本理念について教職員間に一意的な定義が共有されていないというのはまずいんじゃないかと若い頃は思っていたが、馬齢を重ねてから「それでいいのだ」と思うに至った。

リベラルアーツとは日本語に言い換えると「知性の自由な行使を可能にする知識や技芸」のことである。中世ヨーロッパでは文法、論理学、修辞学、算術、幾何、音楽、天文学の「自由七科」を指した。古代中国では士大夫が必修すべき「六芸」として礼、楽、射、御、書、数が挙げ

られた。現代の大学では「一般教養」というと外国語、文学、哲学、歴史学、自然科学などを指す。すべてに共通するのは「言葉の使い方」くらいである。それはつまりこれらの学術にはそれほど汎通性がないということを意味している。たしかに、馬を御す技術を必修にされたら今の学生たちは困るだろう。

時代や場所によって、あるいはそのつどのライフスタイルや科学技術の水準などによって変わるものだとすれば、「リベラルアーツとは何か?」が最終的解答を得ることができないエンドレスの論件になるのも当然である。

「人文書」もその定義を準用してよいのではないかと思う。つまり、人文書とは「知性の自由な行使を可能にする知識や技芸についての書物」のことである、と。要はそれを読むと「頭がよくなったような気がする」書物であれば何でも「人文書」と呼んで差し支えないと私は思う(「差し支える」という方もいるだろうけれど、個人的な定義なのでご容赦願いたい)。そして、たしかにこの世にはそういう書物が存在するのである。いくつか例を挙げたい。

クロード・レヴィ=ストロースは論文を執筆する前には必ずカール・マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』を書架から取り出して、任意の箇所をぱらりと開き、その数頁を読んでから自分の論文を書き始めるとどこかで読んだ記憶がある。マルクスを読むと「頭にキックが入る」のである。その感じは私にもよくわかる。ルイ・ボナパルトのクーデタ事件そのものは

それほど歴史的に重要な事件ではないし、共感できる登場人物もまったく出てこない。にもかかわらず、１５０年後の今もその政治的事件についてのマルクスの「解説」だけはいきいきとリーダブルなのである。なぜか。

「新ライン新聞」以来のマルクスの盟友にヨーゼフ・ヴァイデマイヤーという人物がいて、移住先のニューヨークで『革命』というドイツ語誌を出していた。１８５１年にフランスでルイ・ボナパルトのクーデタが起きたが、事情がよくわからない。そこでマルクスに解説記事の執筆を依頼したのである。ロンドンにいたマルクスは求めに応じてフランスの出来事をアメリカの読者のためにドイツ語で書いた。この複雑な執筆事情がマルクスにふだん以上に際立った「力業」の発動を要求したのである。だから、ここではテクストのコンテンツはどうでもよかったのである。マルクスの鮮やかな語り口そのものが読者の知性を高揚させるのである。

そのレヴィ＝ストロースの書き物も読むと「頭にキックが入る」。私が愛読しているのは『悲しき熱帯』である。この旅行記は広く人口に膾炙した有名な文章から始まる。「私は旅と冒険が嫌いだ。だが、今私はそれについて語ろうとしている。」

旅と冒険が嫌いな文化人類学者はなぜ旅行記を書いたのか。レヴィ＝ストロースがマトグロッソで行ったのは新石器時代と変わらない生活をしているインディオたちの集団（それも最近白人宣教師グループを殺害したらしい集団）に長期間同行することだった。それは驚きに満ちた旅だった

はずである。当然、レヴィ＝ストロースは後学のために研究日誌をつけた。けれども、『悲しき熱帯』は観察記録としては過剰なほどみごとな修辞によって彩られている。ジャングルの中で、インディオたちの生活ぶりを記録するためだけなら、これほど深遠で華麗な文章を書く必要はない。だから、この日記はインディオたちの生活ぶりを記録するためというよりはむしろレヴィ＝ストロース自身を正気に保つために書かれていたのではないかと私は想像するのである。日々経験する文明史的な衝撃を緩和するためには自分自身をクールダウンする必要がある。感情の動揺を抑え、知性を透明にして、判断力に曇りがないようにしておかないと、予測もしなかった事態に遭遇したときに適切に対処して生き延びることができない。だから、逆説的なことに、『悲しき熱帯』の中ではレヴィ＝ストロースがおそらくはげしい怒りや恐怖にとらわれた出来事についての記述において、その文体はきわだって複雑で華麗なものになる。例えば１９４１年にナチスを逃れて大西洋をアメリカに向けて航海しているぎゅうぎゅう詰めの難民船（一人当たりの空間は数十センチ平方という）がマルチニックに到着し、乗客たちが下船して四週間ぶりに風呂に入れると歓喜の声を上げたあと現地の兵隊が示した「歓待」について、レヴィ＝ストロースはこう書いている。

「垢だらけで人で一杯の船の方が陸で乗客たちを待っていた歓待に比べればまだしも牧歌的なものだったということを知るのにさして時間はかからなかった。それは船が投錨するや否やあ

る種の集団的な脳障害に罹患していたとしか思えない兵士(のようなもの)が示してくれた歓待であった。その脳障害は彼らが与える不快を免れるためにすべての知的資源を用いることに専念していなければ、民族学者の関心を引くに値したであろう。」

レヴィ＝ストロースがここで複雑な条件法過去を駆使してみせたのは思い出しても血の気が引く程の怒りを抑えるためである。

未開の森林や荒野を旅した人の旅日記がしばしば傑作として読み継がれるのもおそらく理由は同じである。そこで遭遇した出来事が非人間的で不条理なものであればあるほど、それを叙する文体は謙抑的で論理的なものになる。知性のパフォーマンスをそれだけ高いレベルに維持していなければ、適切にふるまうことが難しいからそうするのである。だから、ピョートル・クロポトキンの『ある革命家の手記』やアントン・チェーホフの『サハリン島』が例外的な文学的完成度を有したのは、それだけ彼らの旅が困難なものだったからである。

かろうじて四冊挙げたところで紙数が尽きた。あとの一冊「頭にキックを入れてくれる本」は自分で考えてください。

お薦めの５冊

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日［初版］』
カール・マルクス著、植村邦彦訳、柄谷行人付論、平凡社ライブラリー、2008年、1500円（本体価格、以下同じ）

『悲しき熱帯』（Ⅰ・Ⅱ）
レヴィ＝ストロース著、川田順造訳、中公クラシックス、2001年、1450円（Ⅰ巻）、1550円（Ⅱ巻）

『ある革命家の手記』（上・下）
P・クロポトキン著、高杉一郎訳、岩波文庫、1979年、品切れ

『サハリン島』（チェーホフ全集12巻に収録）
アントン・チェーホフ著、松下裕訳、ちくま文庫、1994年、1500円

内田 樹 （うちだ たつる）
1950年、東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。東京都立大学大学院博士課程中退。凱風館館長。神戸女学院大学文学部名誉教授。専門はフランス現代思想、映画論、武道論。著書に『ためらいの倫理学』（角川文庫）、『「おじさん」的思考』『街場の憂国論』（共に晶文社）、『先生はえらい』（ちくまプリマー新書）、『街場の戦争論』（ミシマ社）、『最終講義』（文春文庫）、『困難な成熟』（夜間飛行）、『困難な結婚』（アルテスパブリッシング）、編著に『日本の反知性主義』『転換期を生きるきみたちへ』（共に晶文社）など多数。『私家版・ユダヤ文化論』（文春新書）で第6回小林秀雄賞、『日本辺境論』（新潮新書）で新書大賞2010受賞。第3回伊丹十三賞受賞。

悪いおじさんたちと人文知

宇野　重規

人文知にとって大切なものは何か。悪いおじさんと、都会的な粋、そして時間が積み重なった場所である。この三つが揃わないことには人文知は盛り上がらない。そして、そのような目で現在の日本社会を見たとき、とても不安な気分になる。寂しい気持ちになる。このままで日本の人文知は大丈夫だろうか。でも、深刻な顔をするのは粋ではない。人文知は軽やかでないといけない。四角四面な顔をして警世の言を吐くのは、また別の機会にしよう。

僕が大学に入った頃、日本はバブル時代の最中であった。僕たちより少し年長の、知的に背伸びした人たちは、「ニューアカ(デミズム)」の世代と呼ばれたものだ。フランス現代思想、ポスト構造主義の思想。そう書くと、なんだか難しい感じになるけれど、時代の気分はあくまで「軽やかに」であった。浅田彰さんの『構造と力』や『逃走論』が流行った頃でもある。固苦しい顔をして自分を縛りつけるのはやめにしよう。それより大切なのはフットワークである。管理社会の拘束を涼しい顔をしてやりすごすこと、それが大事だと言われている気がした。

とはいえ、僕ら(というか僕)のような遅れてきた世代は、どこかでそれを生真面目に学習してしまった気がする。一生懸命「軽やか」でなければならないと思ってしまった。たしかに浅田さん

の本は軽やかだけど、中身はとても充実したフランス現代思想への誘いであった。それを一生懸命「勉強」しようとしたところに、僕らの（あるいは僕の）つまずきがあった気がしてならない。

何かを知ることは楽しいことだ。本を読むのは、自分を自由にすることだ。それを肩肘張らずに言えるようになるには、まだ時間が必要だった。

僕らを人文知の自由な世界に導いてくれたのは、何人かの「悪いおじさん」たちであった。パッと思いつくのは、例えば山口昌男さんであり、植草甚一さんである。この人たちの本を初めて読んだとき、何だか「知の世界」なるものは楽しいものであり、そこに足を踏み入れることはとても心が浮き立つことであると感じた。

山口昌男さんの本を初めて読んだのは『知の旅への誘い』であったか。共著者の中村雄二郎さんの文章も素敵だったが、悪いことに、その頃中村さんの『術語集』がベストセラーで、入試の頻出著者でもあった（いま読んでも、この本はとてもよく出来ている）。なんだか勉強の続きの感じがしてしまった中村さんと比べ、山口さんはともかく「いい加減」な感じがした。それがよかったのかもしれない。ともかく世界のどこかに旅をして、たまたま入った古本屋の軒先で、へんてこりんな本を見つけること。そこから世界が違って見えるようになる。そう感じたのは山口さんの本のおかげだ。

山口さんのキーワードは、「道化」。演劇などでふざけて、どうでも良さそうなことを言って、

人々を混乱させる登場人物。それでも実は、この人物こそが、物語世界を支え、揺さぶり、面白くしている。「トリックスター」という言葉を知ったのも、山口さんのおかげだ。善悪の彼岸にいるいたずらものこそが、硬直した世界を一変させる。僕らの学ぶべき「知」とは、まさにそういうものではないか。うっすらとそう思うようになった。

植草甚一さんも「悪いおじさん」の一人だ。このおじさん、ともかく自分の趣味の世界に生きている。それも半端ではない。ミステリ、映画、ジャズ、好きなものはとことん読んで、聞いて、見て、収集し、スクラップする。ただし、そこには「勉強」や「研究」の匂いはない。あくまで「雑学」なのだ。ニューヨークをふらふらと歩き回り、好きな店をひやかす。「散歩と雑学が好きなおじさん」、そうだ、これしかない。こういうおじさんになりたいとずっと思って生きてきた。知的で、粋で、自由な人。

ただし、やはり道は険しかった(すぐにまた真面目になるのが、自分の悪いところだ)。山口さんも植草さんも、多分、本来は生真面目な人だったと思う。ただ、そういう自分を、いつかどこかで自由にする術を心得て、あるいはそうなれる場所を見つけて、自分のスタイルを築き上げてきたのではないか。僕はいつまでも、山口さんや植草さんの周辺で、それに憧れつつ、結局は二人のようになれないまま、「ただのおじさん」になってしまった。本は好きだけど、そして浴びるように読んでいると思うけれど、どうしても二人のようにはなれない。どうしてなのかな、と考

えてしまう。

一つ思うのは「場所」だ。山口さんも、植草さんも二人が自分らしくなれる場所がある。パリの古書店だったり、ニューヨークの映画館だったりジャズバーだったりする。別に日本でもいい。二人は日本のあちこちに、素敵な居場所と散歩コースを持っている。そういう場所は、二人にとって、物を考え、時間の流れを振り返り、そして今の自分を再確認するための場所だ。人は物を思うとき、それを捉えなおすために時間の座標軸が不可欠だ。山口さんや植草さんはそれがぶれなかったし、そのための場所を維持し続けた。それが彼らの自由な書き振りを支えていた気がする。

それと比べると僕はどうだろうか。僕はまだ彼らの自由な書きぶりを自分のものにしていない。僕は政治思想史を研究しているが、我が先達を振り返ってみても、丸山眞男さんや藤田省三さんには、どこか山口さんや植草さんと通じる自由さがあった気がする。実際、あれだけ真面目に見える丸山さんの論文には、落語を思わせる軽口や対話のやり取り、まぜっ返しやユーモアがある。『現代政治の思想と行動』のような本にはそれがよく出ていると思う。丸山さんは自分の本来の日本政治思想研究を「本店」、それを踏み出た専門外の著作を「夜店」と呼んだが、この人は夜店を冷やかしながら、ちょっとばかり意地の悪い冗談を言っているときの方が、本領を発揮していると思えなくもない。

藤田省三さんもそうである。丸山門下の秀才として出発した藤田さんは、60年代の政治の季節

を経て、イギリスの人類学や日本の古い物語世界に沈潜する。隠れん坊の話をしたり、戦後の焼け野原の話をしたりするとき、藤田さんの議論はもっとも自由で、伸びやかだ。『精神史的考察』が、彼の一番いい部分を示していると僕は確信している。こういう二人に憧れてこの道に入ったが、どうも二人のようにはなれない。永遠に門前の小僧なのかもしれない。

最後にもう一つだけ。日本において人文知を考える上で、もっとも大切な場所はどこだろうか。御茶ノ水の山の上ホテルあたり、その候補かもしれない。多くの文人がここに宿泊し、食事をし、そして「館詰め」になって原稿を書いた。今でもこの古くて小さなホテルに行くと、どこかそのような時間の蓄積を感じる。それを描いた常盤新平さんの『山の上ホテル物語』は、このホテルをめぐるそんな記憶を思い起こさせてくれる。

今の時代、「悪いおじさん」は減り(「ただのおじさん」は増えた)、「都会的な粋」は過去のものとなり(表面的にこぎれいな建物に代わった)、「時間が積み重なった場所」は絶滅寸前である(どこも無時間的になってしまった)。これでどうやって人文知は維持されるのか、考えると憂鬱になる。

でも、それではまずい。四角四面と悲憤慷慨はけっして美徳ではない。軽やかに、しなやかに、しかも長い時間の枠組みで、ユーモアをもって現代社会とそこに暮らす自分たちを描くこと。それを楽しくやれないようでは人文知ではないのだ。

今、僕はこの原稿をドイツのベルリンで書いている。いまだ古書店の多いパリも好きだけれど、

緑が多くて開放的なこの街も好きだ。ここで書いたような人にはなれないが、それでも自分なりにリラックスしている。日本のあちこちに、こういう場所を見つけていきたいと思う。やはり人文知は楽しくないといけない。

お薦めの5冊

『山口昌男コレクション』
山口昌男著、今福龍太編、ちくま学芸文庫、2013年、1900円

『ぼくは散歩と雑学がすき』
植草甚一、晶文社、1970年（2009年新装）、3000円（ちくま文庫、2013年、1200円）

『山の上ホテル物語』
常盤新平、白水*u*ブックス、2007年、1200円

『精神史的考察』
藤田省三著、みすず書房、1997年、品切れ（平凡ライブラリー、2003年、1300円）

『〔新装版〕現代政治の思想と行動』
丸山眞男著、未來社、2006年、3800円

宇野 重規 （うの しげき）

東京大学社会科学研究所教授。政治思想史・政治哲学専攻。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。博士（法学）。主な著作に『トクヴィル　平等と不平等の理論家』（講談社選書メチエ）、『〈私〉時代のデモクラシー』（岩波新書）、『保守主義とは何か』（中公新書）、『共和国か宗教か、それとも』（編著、白水社）などがある。

気がつけば人文書まみれ

大塚　ひかり

「むかぁしむかし、おじいさんとおばあさんがいました」

いつのころか、記憶にないほど昔から、そんなイントロで始まる昔話を、母方祖母や父に読み聞かされて育った。

母方祖母は戦前、夫の仕事でニューヨークで暮らしていたハイカラな人だったが、さすがに明治生まれだけあって、タヌキや狐の出てくる話をそらんじていた。一方、父は未來社の「日本の民話」シリーズをテキストにしていた。

やがてその中に、かぐや姫や浦島太郎、海幸山幸のように、古典文学にルーツがある、あるいは書き残されているものがあると知り、中学生のころから古典文学にはまり、岩波の日本古典文学大系や、小学館の日本古典文学全集を読んだ。

家族と話していても友達と関わっても、なにか価値観のずれを感じる、現世に違和感を覚えていた思春期の私は、古典や昔話の中にこそしっくりするものを感じ、のめり込んでいった。

その流れで出会ったのが、民俗学者の柳田國男である。

今に残る習俗や事物から、過去の歴史を探っていく彼の方法は、昔話や古典文学に今の自分を

発見しては楽しんでいた私にとって、まさに「目からウロコが落ちる」ものだった。

私は「過去」に「今の自分」を探していたが、民俗学は「今」に「過去の暮らし」を探る。自分にとって生きづらい「今」が、私の好きな昔話や古典が息づいていた「過去」への糸口になる。

そう思うと、「今」がとたんに素敵なものに見えてきた。

なかでも『木綿以前の事』は衝撃的だった。

木綿の出現以前には、庶民が肌につけるものといえば、ごわごわして、染めの容易ならぬ麻だった。絹は縁遠いのはもちろん、あまりにも滑らかすぎるし、手触りも冷たい。

それが、やわらかで、染めの容易な木綿が出現することで、庶民の暮らしがいかに色彩豊かな、潤いのあるものになったか。その出現が革命的なものであったか。

「木綿」という素材の「肌ざわり」や「いろどり」という、きわめて感覚的な要素に注目し、論を展開していく柳田國男の手腕に、私もこんな研究ができたら……と胸膨らませ、『定本　柳田國男集』全三十一巻・別巻五巻を古本で揃えて貪り読んだ。

大学では迷わず日本史学を専攻し、サークルは日本民俗学研究会に入って、地方に昔話採集に行ったり、中世から続く祭を見学しに行ったりした。

サークルはいろいろあって、二年足らずでやめてしまったが、古典好き・歴史好き・民俗学好

きは、その後も一貫して変わらない。

全集の古典文学を読みつつ、系図を作っては、歴史学、民俗学の本を読んだ。

大学院へ進学して日本史学か民俗学の勉強を続けたいとも思ったが、母親に、

「そんなところへ行ったら(嫁に)いき遅れる」

と反対され(今じゃ考えられませんよね)、それを押し切ってまで意志を貫く強さもなかった私は、歴史・民俗とは無関係の広告宣伝関係の出版社に就職した。

古典好きな一方で、漫画を描くのも大好きだった私は、幼稚園児のころから手描きの雑誌を作り、そこに架空の広告を入れたりして、広告宣伝というものにも非常に興味があったのだ。

仕事は楽しかった。

しかし神奈川県の藤沢市から二時間近くもかかる通勤がつらくて、就職二年目に東京に引っ越した。

はじめての一人暮らしのための引っ越しには、もちろん『定本　柳田國男集』を持って、以後、引っ越しするたび一緒に移動し、今も私のそばにいる。

民俗学と並行してのめり込んでいたのが日本史だった。

日本の古典文学が生まれた背景を知るには日本史をやるしかないと思ったのだが、まぁ今でい

う「歴女」というか「歴オタ」で、中学生のころには、母にせがんで柳生十兵衛のいた奈良の柳生の里に行ったり、母方祖母と土方歳三の日野の生家を見に行ったものである。

さらに大学では、日本中世史を専攻したこともあって、歴史学関係の人文書には今に至るまでずいぶん世話になった。

とくに黒田日出男先生の、絵巻から歴史を読み取るというコンセプトの本の数々は、古典好き・漫画好きの私の心に、ド・ストライクで打ち込んできた。

黒田先生は、私が早稲田大学に在学していた一九七九年〜八三年当時、非常勤講師として教鞭をとっていらして、そのころからずっと「絵巻」が史料になると強調なさっていた。大学院に行けば……と勧めてくださったのも黒田先生であった(結局、行かずじまいだったわけだが)。

黒田先生は当時、「しぐさ」という、これまで歴史学者があまり注目してこなかったテーマを追究していて、扇で顔を隠すしぐさ、扇の骨のあいだから顔をのぞかせるしぐさの持つ意味について語っていらした。こういうしぐさは、絵巻で見るのが一番で、絵巻は史料の宝庫だともおっしゃっていたものである。

そうした先生の研究は、『姿としぐさの中世史——絵図と絵巻の風景から』などで、今も読めるはずだ。

私が、中央公論社(当時)の絵巻シリーズを買うようになったのも黒田先生の影響で、

「こういう本はすぐに絶版になるから、買えるうちに買っておくといい」というのが先生の口癖だった。本当にその通りだと後年、痛感している。

指導教官の瀬野精一郎先生の授業も楽しかった。

黒田先生が「熱」なら瀬野先生は「冷」といった趣で、自虐的でシニカルでいながらユーモアたっぷりなエッセイで、歴史を親しみやすくしてくれた。

先生の『歴史断想』『歴史の残像』『歴史の余燼』は、先生の戦争体験などを交えながら綴られている。

驚くのは、先生が知り合った人の生没年に至るまで、正確な年代表記があることで、ちりばめられた現代批判を読んでいると、不思議と元気が湧いてくる。同時に、「昔はこうだった」という思い込みや、当たり前に聞き過ごしていたことばが、実は間違っていることに気づかせてくれる。

「『サセホ』か『サセボ』か」「良妻賢母」といったエッセイなど、身近でいながら、歴史心のようなものが漂っていて、学生時代の初心を思い出させてくれる。

お世話になったというか、とにかく好きだったのは、法政大学出版局の「ものと人間の文化史」シリーズだ。

吉野裕子の『蛇』、久下司の『化粧』など、ワンテーマを専門家が深く分かりやすく切り込んでいく。

小さいころから漫画を描くのが好きだったため、顔の美醜や体格とキャラクターの関係に興味があった私は、『「源氏物語」の身体測定』や『ブス論』といった本を書いたものだが、『化粧』は私のそうした関心に応えてくれるものであった。

また一九九九年、ストレスが歯の痛みや噛み合わせの違和感を招く「歯科心身症」という心の病を発症したこともあって、古典に出てくる歯の描写が気になって、ファイリングしていたのだが（私は気になる事項はテーマごとにファイリングしている）、歯科医師で、歯の博物館の館長をしている大野粛英の『歯』は、四十年間にわたる著者のコレクションの写真も豊富で、貴重な資料集であると感じる。

こうしてみると、私の興味の対象は、古典文学と日本史の境、民俗学と日本史の境、美術史と日本史の境……といった「境界」ジャンルであるという気がする。

そんな私が、「境界」ジャンルにあふれた人文書に親しみを感じるのは当然で、私の人生、気がつけば、「人文書まみれ」だったなぁと思うことしきりだ。

お薦めの５冊

『漢倭奴国王から日本国天皇へ――国号「日本」と称号「天皇」の誕生』
　冨谷至、臨川書店、2018年、3000円

『院政期社会の研究』
　五味文彦、山川出版社、1984年、品切れ

『歴史としての御伽草子』
　黒田日出男、ぺりかん社、1996年、3200円

『フリークス――秘められた自己の神話とイメージ』
　レスリー・フィードラー著、伊藤俊治・旦敬介・大場正明訳、青土社、1990年、品切れ

『孝謙・称徳天皇――出家しても政を行ふに豈障らず』
　勝浦令子、ミネルヴァ書房、2014年、3500円

大塚　ひかり　（おおつか　ひかり）
1961年生まれ。早稲田大学第一文学部日本史学卒業。出版社勤務を経て古典エッセイストに。著書に個人全訳『源氏物語』全六巻、『ブス論』（以上、ちくま文庫）、『昔話はなぜ、お爺さんとお婆さんが主役なのか』（草思社文庫）、『本当はひどかった昔の日本』『本当はエロかった昔の日本』（以上、新潮文庫）、『女系図でみる驚きの日本史』（新潮新書）、『源氏物語の教え――もし紫式部があなたの家庭教師だったら』（ちくまプリマー新書）など。
西浦の田楽、遠山の霜月祭など、中世から続く祭を見るのが好き。趣味は系図作り。

崖っぷち院生と「笛吹き男」

川添　愛

初めて人文書というものを手に取ったのはいつだっただろうか。大学に入ってから何冊か読んだはずだが、ほとんど理解できなかったということしか覚えていない。２０１８年現在、人々の読解力の低さが話題になっているが、当時の私の読解力もお粗末で、今のＡＩよろしく「暗記」「パターンマッチ」および「今までこうだったからこう」という推測を駆使しながらどうにかやっていた。それで間に合わせられたのは、当時の私が異様に器用だったからなのか、たまたまそのときの環境がイージーモードだったからなのか、今となってはよく分からない。ただ不幸だったのは、そんな中で私が「自分は研究者に向いている」と勘違いしてしまったことだ。ちなみに私が専攻していたのは言語学である。

大学院に入ってからは悲惨であった。そこで目の当たりにしたのは、先生方や先輩方の頭の強さである。基礎的な学力も覚悟も足りない学生は、完全に打ちのめされてしまった。今思うと、そこがまさに研究者としての第一歩であったし、大切な基礎固めの時期でもあった。しかし大学院時代というのは、力が伸びていても、それを自覚できる機会は少ない。それに、研究の世界の本当の厳しさ、世知辛さが見え始め、希望より不安の方が大きくなる。そうして数年が過ぎると、

いつしか根拠のない自信も、研究に対する興味も失ってしまった。つまずいた院生のご多分に漏れず、私も博士論文が書けず、自分はこのまま何も成し遂げずに腐っていくのではないかと思っていた。阿部謹也先生の『ハーメルンの笛吹き男』に出会ったのは、ちょうどその頃である。当時は論文以外の読み物と言えば漫画ぐらいしか読んでいなかったが、『笛吹き男』には妙な魅力を感じた。そして読み始めると、一気に引き込まれてしまった。

まず驚いたのが、「あれ、本当の話だったの？」ということである。この本の序盤で、有名な「ハーメルンの笛吹き男」の伝説が完全な創作ではなく、史実に基づいたものであることが明かされる。その史実というのは「１２８４年６月に、ハーメルン市の１３０人の子供たちが姿を消した」という記録である。著者の阿部謹也先生は三十代半ばでドイツに留学し、文書館で研究資料を集めているときに偶然この記録に出会ったのである。子供たちが失踪した理由については多くの学者がさまざまな説を唱えていたが、阿部先生はそれらをハーメルン市の成立の歴史、また当時のヨーロッパ社会の状況から検証していく。そこも非常に面白いのだが、『笛吹き男』の真に衝撃的な点はその先の、なぜこの失踪事件が「笛吹き男伝説」に変容したのかという問題にある。それを考察する過程で、中世ヨーロッパの人々の世界観が浮き彫りにされるのである。

笛吹き男という切り口から見えてくる「人々の心の世界」に対して、私は深く暗い穴をのぞき込んでいるような不気味さを感じた。それを生んでいるのは、歴史の深いところにある何重もの

「歪み」だ。不幸な出来事を生んでしまった社会の歪み。その出来事を伝説に落とし込む過程で生じる歪み。そして、伝説を説明しようとする行為に内在する歪み。それらの一つ一つは、理不尽さの中で生き延びるための必要悪のようなものではあるが、それらに適応し続けた先にあるのは言いようもない閉塞感だ。

こういった歪みの中から真実をすくい上げるために阿部先生が採っている方法は、信頼できる資料を探して丁寧に読み解くという、きわめてオーソドックスなものだ。ハーメルン市の事件と伝説に関わる膨大な記録や研究を一つ一つ読み解いていく過程を思って、当時の私はただただ気が遠くなった。しかしそこから次々に明るみになる事実――人々が東方への植民に至った諸事情、遍歴芸人たちの社会的地位の変化、後世の人々の苦境が事件の解釈に与えた影響などは面白く、最後まで飽きずに読んでしまった。

『笛吹き男』を読んだ私は、どう変わったか。もし、通販番組の「利用者の声」のように「私は研究への情熱を取り戻し、すぐさま博士論文を書き上げることができました！」とでも言えれば、この文章にも綺麗なオチが付く。だが残念ながらそういうことはなく、読書の興奮から醒めると、暗い現実が暗いまま待っているだけだった。ただ、この本を読んで、最悪の状態から這い上がるのに必要な材料をいくつか得たのは確かだ。それらはざっくり言えば「諦め」とか「割り切り」のようなものである。

一つには、人間が集まって行う活動には必ず「歪み」が生じることを認識できたことがある。アカデミアの中で生き抜くには同業者たちに認められなくてはならず、そのためには多少なりとも、アカデミアの構造や世間の要求に自分をうまく適応させる必要がある。私は初めてその事実にぶち当たったときから、ひどい違和感を感じていた。しかしそれほどの業界にも、また歴史上のどの時点にも起こっているということが、『笛吹き男』を読んでよく分かった。

そういった歪みの中で純粋さを貫くには、相当なエネルギーが必要だ。『笛吹き男』を読むと、阿部先生の原動力が「真実を知りたい」という思いであることが痛いほど分かる。私はその点に心を動かされると同時に、自分と研究対象の間にそういった関係が決定的に欠けていることを認めざるを得なかった。それは酷なことだったが、どうにか受け入れることができたのは、阿部先生の率直な筆致の間に、どこかしら自分の心のゆらぎと共鳴するところを感じたからかもしれない。けっしてあからさまにではないが、この本の中には確かに、研究に伴う苦しみ、自分の力の不足と正面から向き合っている人間の葛藤がにじみ出ていた。そこで見えてくるのは、成功した研究者の得意顔ではなく、道なき道を切り開いている人間が、生傷だらけの顔に少しのはにかみと共に浮かべる笑みのようなものだ。結局、私が博士号を取るまでにはその後何年もかかり、その過程では多くの方々の力を借りなければならなかったが、自分のことを棚に上げて業界の文句を言うことや、楽な道を探してかえって時間を無駄にするようなことは少なくなった。その点に

おける『笛吹き男』の影響は小さくないと思われる。

それから数年後、阿部先生がご自身の研究歴を綴った『自分のなかに歴史をよむ』の文庫版が出版された。その頃私は自然言語処理へと分野を移していたが、そこでも相変わらず、自分と研究対象との間の「よそよそしさ」に悩まされ続けていた。阿部先生のような熱量で研究に取り組むことは、一生できないように思っていた。そんなときにこの本を読んで分かったのは、阿部先生の幼少期の経験が、中世ヨーロッパ史という分野の選択、また笛吹き男研究の強い動機になっていたということだ。ただし阿部先生はそのことを早くから自覚していたわけではなく、学生時代に上原専祿先生に言われた「どんな問題をやるにせよ、それをやらなければ生きてゆけないというテーマを探すのですね」という言葉をきっかけに、長い間考え続けたとのことだった。それを知って、今の自分はもしかすると、自分自身を十分に掘り下げる作業をしていないのではないかと思うようになった。

それ以来、断続的にではあるが、自分の内側に目を向けようという努力は続けている。残念ながら「それをやらなければ生きてゆけないテーマ」にはまだ出会えてはいないが、少しずつ近づきつつある実感はある。阿部謹也先生の本は、世界に目を向けさせてくれると同時に、自分の中をのぞき込むきっかけを与えてくれた。そういう人文書が、私は好きだ。

お薦めの5冊

『ハーメルンの笛吹き男――伝説とその世界』
　阿部謹也、ちくま文庫、1988年、760円

『自分のなかに歴史をよむ』
　阿部謹也、ちくま文庫、2007年、600円

『不実な美女か貞淑な醜女（ブス）か』
　米原万里、新潮社、1998年、550円

『カクレキリシタンの実像――日本人のキリスト教理解と受容』
　宮崎賢太郎、吉川弘文館、2014年、2300円

『トマス・アクィナス　肯定の哲学』
　山本芳久、慶應義塾大学出版会、2014年、2800円

川添 愛 （かわぞえ あい）
作家、元国立情報学研究所社会共有知研究センター特任准教授。専門は言語学、自然言語処理。著者に、『白と黒のとびら――オートマトンと形式言語をめぐる冒険』（東京大学出版会、2013年）、『精霊の箱（上・下）――チューリングマシンをめぐる冒険』（東京大学出版会、2016年）、『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット――人工知能から考える「人と言葉」』（朝日出版社、2017年）、『自動人形（オートマトン）の城――人工知能の意図理解をめぐる物語』（東京大学出版会、2017年）がある。Twitter ID: @zoeai

弱い真理は誘い、導く――國分功一郎『スピノザの方法』を読んで

木村 草太

はじめに――分かる気のない人

インターネットを見ていると、「分かる気のない人には、何をどう伝えても無駄」という現象がしばしば観察される。これほどまでに分かり合えない人同士が、どうやって共存できるのだろうか。

そんなことを考えて、ふと手にとったのが、國分功一郎『スピノザの方法』だった。スピノザ（1632–77年）はオランダで活躍した哲学者で、『デカルトの哲学原理』と『神学・政治論』の二冊を刊行し、五冊の書物を書き残している。『神学・政治論』は、政治権力と宗教との関係や信教の自由について論じた著書で、憲法学者の間でも注目されている。例えば、私の先輩である福岡安都子氏は、この本の聖書解釈をテーマに、『国家・教会・自由――スピノザとホッブズの旧約テクスト解釈を巡る対抗』という浩瀚な論文を上梓した。

國分氏の著書は、スピノザの『知性改善論』『エチカ』『デカルトの哲学原理』などを丹念に読み解き、スピノザの思考方法を探求したものだ。とても面白い本だったので、紹介してみたい。

1　無力な真理

國分氏の著書で印象的なのが、スピノザの「真理」についての説明だ。普通、「真理」というと、それを示せば、どんな相手も制圧できる強力な何かを思い浮かべる。「これが真理だ」というセリフには、「どのような相手でも論破できる」という自信があふれており、そう言われた相手は、煩わしく思うことだろう。

デカルトは、全てを疑う強烈な懐疑論者を設定し、彼らに対し「自分が何かを知っているという事実をどうすれば確証し、伝達し、共有できるか、それを徹底的に考えた」。デカルトの「真理」は、いかなる懐疑論者も疑い得ない「一撃必殺の真理」だ。有名な「cogito ergo sum」の命題も、「私が考えている」という、いかなる者にも否定できない事実から、他者の懐疑を制圧する真理の出発点だ（同書47頁）。

これに対し、スピノザの「真理」は、人当たりが柔らかい。スピノザを支配する思考のイメージは、「人はあることを知っているとき、自分がたしかにそれを知っているという事実を知っているのであって、自分が本当に何事かを知っているのかどうかを誰かに尋ねる必要もないし、自分が知っているのかどうかを判断する基準も必要もない……」という。「自分が何かを知っているという事実を確証するための基準を、その事実以外のところに求めないということは、他者とその事実の共有を求めないということ」だ（同書46頁）。

スピノザは、自分が知っていることを疑うような懐疑的な他者を視野に入れない。スピノザにとって、「真理」は「適切な様式によってそこに到達したときに」知ることができるもので、その「様式」を通り抜けない人には伝達できないものと、ある意味端から諦めている。

スピノザは、懐疑論者、というより他者を、論駁しようとか、説得しようという方向を持たない。未完の著書『知性改善論』47–48節で、スピノザは懐疑論者について、「結局このような人間とは、学問について語ることができない」と切り捨てている。スピノザにとって、真理は、「討議のような場においてはまったくの無力」な弱いものだ(同書52頁)。

こうした議論を見ると、まじめな人ほど、「真理とはそういうものでよいのだろうか」と不安になるだろう。

2　デカルトを読むスピノザ

では、スピノザは、デカルトの必殺技、「cogito ergo sum」の命題をどのように受け止めたのか。

スピノザにとって重要なのは、「私は思惟する、ゆえに私は存在する」の命題は、「大前提の隠された三段論法ではない」ということだ。デカルトの命題が、「①思惟している者は、存在していると言える(大前提)、②ところで、私は思惟している(小前提)、よって③私は存在している(結論)」という三段論法の①大前提を隠した表現だとしたら、この①大前提が懐疑の対象になっ

てしまいデカルトの立論は崩壊する（同書１２０頁）。

そこで、スピノザは、「cogito ergo sum」は、「ego sum cogitans（私は思惟しつつ存在する）」と同義の単一命題だとする（デカルトの命題では、cogitoとsumが分節されているのに対し、スピノザはcogitoをcogitansという現在分詞の形にする）。これは何かを証明するものではなく、思惟している状況を描写するだけの命題だ。國分は、こうした命題の展開は、「デカルト哲学を困難な方向へと追いやる原因となっている説得というモーメントをそこから削り取ろう」とするものだという（同書１２２頁）。

スピノザは、デカルトの神の存在証明についても、同様の方向で読解する。デカルトは、神の存在について、経験的な証明と先験的な証明の二つを立てつつ、経験的な証明を前面に出した。デカルトは他者の説得に拘ったために、現に人々の中にある「既成事実としての神の観念」からの証明に力点を置かざるを得ないのである。他方、スピノザは、説得にとらわれないため、現に人々がどのような神の観念を持っているかということとは無関係に、神の観念を構築し、そこから神の存在を導き出すべきだとする。かくして、先験的な証明が高く評価される（同２４２頁）。

ここでも、スピノザは、他者への説得から自由である。この身軽さは魅力的だ。しかし、この自由は、「分かる奴には分かるし、分かる気のない奴には何をどう伝えても無駄」という身もふたもない結論に陥らないか。スピノザを読んでも、インターネットを観察すれば分かるような、

どうでもよいことしか理解できないのではないか。

3　誘い、導く

しかし、國分は、スピノザは、「精神の本性と法則」を「認識しなければならない」と説く合理主義者だという。それは、「分からない奴は放っておいてよい」という人ではないということだ。

スピノザによれば、「精神の本性と法則」は、認識する当の本人によって発見されない限り、当人にとっては「分からない」。「あ、分かった」という経験は、当人に「分かる」とはどういうことかを理解させる一方、当人以外の誰かには何も伝えられない。そうだとすれば、一撃必殺の普遍の真理を示して、無理やり説得しようと試みても、それは徒労にすぎない。

では、どうするのか。スピノザは、「無限に多くの属性を有する実体という原理、すなわち神の観念」へと至る思惟の手続を見せることで、一緒にやってみようと我々を「誘い、導く」。スピノザの方法は、各々の精神の特異性を考慮に入れて、各々の精神の力を導き出すことなのだ（同書350、354–6頁）。

國分は、スピノザを「近代哲学の夢を、近代哲学とは違うやり方で達成しようとしている」と評価している。

おわりに——さわやかな可能性

人文書の中には、難解な専門用語をちりばめ、よほどの専門家でなければ知らないことに「周知のように」との枕詞をつけてすっ飛ばし、門外漢をはねつけるようなものもある。これに対し、國分氏の著書は、丁寧な言葉遣いや鮮やかな小括があり、私のような専門外の読者にも心地よい（もちろん、哲学の専門家でないと十全に理解できないところは多々あるのだろうが）。読みながら、「なぜ、こんなに爽やかに論を進めるのか」と不思議に思ったが、考えてみれば、スピノザの「誘い、導く」方法を実践していたということがよく分かった。

私が研究対象とする「法」は、多様な価値の共存のための枠組みである。この世界には、様々な世界観、歴史観、宗教など、様々な価値があり、それぞれの価値は、時に苛烈に対立する。法について伝えようとするとき、どうやってこの「分かる気のない人」に伝えたらよいのか、と途方にくれることもある。

國分氏が示した「スピノザの方法」は、説得とか、一撃必殺の真理による強要ではない、伝え方の可能性を教えてくれた。各々の個性と力の尊重という方法は、近代憲法の中核にある「個人の尊重」という考え方とも共鳴する。

このように思いがけない視座を与えてくれるのが、人文書の楽しみである。

お薦めの５冊

『意味と他者性』
大澤真幸、勁草書房、1994年、3500円

『比較不能な価値の迷路――リベラル・デモクラシーの憲法理論〔増補新装版〕』
長谷部恭男、東京大学出版会、2018年、4000円

『脱住宅――「小さな経済圏」を設計する』
山本理顕・仲俊治、平凡社、2018年、2800円

『100のモノが語る世界の歴史』（全３巻）
ニール・マクレガー著、東郷えりか訳、筑摩選書、2012年、1900円（１巻）、2100円（２・３巻）

『幻獣辞典』
ホルヘ・ルイス・ボルヘス著、柳瀬尚紀訳、スズキコージ絵、晶文社、2013年、品切れ

木村 草太 （きむら そうた）
1980年神奈川県生まれ。東京大学法学部卒業、同助手を経て、現在、首都大学東京法学部教授。専攻は憲法学。著書に『キヨミズ准教授の法学入門』（星海社新書）、『憲法の創造力』（NHK出版新書）、『集団的自衛権はなぜ違憲なのか』（晶文社）、『憲法という希望』（講談社現代新書）、『憲法の急所――権利論を組み立てる〔第2版〕』（羽鳥書店）、『木村草太の憲法の新手』（沖縄タイムス社）など、共著に『社会をつくる「物語」の力――学者と作家の創造的対話』（光文社新書）、編著に『子どもの人権をまもるために』（晶文社）などがある。

読者に薦めたい人文書

佐藤　優

われわれは危機的状況の中で生きている。北朝鮮やイランの核開発をめぐって、米国のトランプ大統領が無理筋の政策を取れば、核戦争を誘発しかねない。かつて地球を席巻した恐竜が滅びたように、われわれヒト（ホモ・サピエンス）の時代も、歴史的過去になってしまう可能性がある。

その原因を存在論的に掘り下げて理解するためには、学知がとても重要になる。私の理解では、人類の危機の原因は、人間が超越的なるものに対する畏敬の念を忘れた近代的人間観にある。それについて理解するためには、ドイツのプロテスタント神学者で哲学者、教育学者であったフリードリヒ・シュライアマッハー（1768年11月21日～1834年2月14日）の『宗教について――宗教を侮蔑する教養人のための講話』（春秋社）を精読するのが有益だ。原著は1799年に刊行されたにもかかわらず、現代的意義を失っていない。近代的なパラダイムは決して終わっていないことが本書を読むとよくわかる。

シュライアマッハーは、宗教が無用の長物になっている現状についてこう述べる。

〈みなさんは人類と祖国、芸術と学問さえあれば十分で、これであらゆるものを包括できると信じているようです。みなさんの心は、これらによって完全に満たされてしまっているので、世

界の彼岸にある、永遠であり、聖なる存在には、どこにも場所も提供することができず、みなさんは、このような存在への感覚や、それと共に在るという感情も持てなくなっているのです。〔というのも〕この世界の生活が、みなさんが望んだように、大変豊かになり、また多様性を持ったものになったので、永遠的なものはもはや何の必要もなくなってしまったのです。そしてみなさんが自らひとつの宇宙を創造したので、もはやみなさん自身を創造した者のことを考える必要がなくなってしまったのです。私にもよく理解できることは、みなさんが、このような問題については、既に哲学者や預言者たち、さらに付け加えていうならこういう問題を侮蔑している者たち、逆にそのような態度と対峙しようとしている聖職者たちによって、十分に論じつくされてしまっているので、何かこれ以上新しいこと、より適切なことを語ることはもはや何もない、ということで一致しているということです。そして何よりもみなさんは、この問題について聖職者の語る言葉をもはや聞こうとは思わないのでしょう。〉(4頁)

21世紀に生きるわれわれも、人類と祖国、芸術と学問さえあれば十分で、これであらゆるものを包括できると信じている。コペルニクス革命以降の人間は、「上(天)にいる神」というような概念を信じることはできない。この現実をシュライアマッハーは正面から受け止め、神の場を転換した。その認識がこれから引用する宗教に関する定義にあらわれている。

〈宗教は形而上学のように、宇宙をその本性に基づいて規定したり、説明することを望みませ

ん。また道徳のように、自由の力や人間のあたかも神になったかのような勝手な意識から宇宙を形成したり、完成させようとも願いません。宗教の本質とは、思惟でも行動でもなく、それは直観と感情なのです。宗教は、宇宙を直観しようとするものであり、宇宙に固有なさまざまな表現と動きに対して、畏敬の念をもってそれに耳を傾け、子供のように受身な態度で、宇宙の直接的な影響にとらえられよう、あるいは満たされようとするものなのです。このように宗教は、宗教の本質を構成するあらゆる点で、また宗教の影響を特徴付けるすべての点で、形而上学や道徳と対立しているのです。〉(51頁)

宗教は形而上学でないということは、天にいる神という概念を否定することだ。また、宗教をカントが言うような道徳律に還元することもできない。宗教は、形而上学とも道徳とも位相を異にするものだ。形而上学ならば恣意が決定的に重要になる。道徳では行動が問われる。これに対して、宗教においては、道徳も行動も重要ではない。このような前提に立ってシュライアマッハーは、宗教の本質が直観と感情であると定義する。直観と感情でとらえられる神はどこにいるのだろうか。それは人間の心の中にいる。誰も心がどこにあるかを示すことはできない。しかし、人間には確実に心が存在する。心の中に目には見えないが確実に存在する神がいる。こうしてシュライアマッハーが神の場を形而上学の天から心の中に転換したことによって、キリスト教とコペルニクス以降の宇宙像は矛盾しなくなった。その結果、プロテスタンティズムは、合理性に

基づく科学技術の発展を阻害しなくなった。プロテスタンティズムという形態で、キリスト教は近代資本主義に対応することができるようになったのである。

それならば、教会のような時代後れの制度はときの経過と共に消滅するのであろうか。キリスト教は、自然的宗教に解消されてしまうのであろうか。シュライアマッハーはそうは考えない。

〈みなさんは、みなさんの目の前に存在するひとつの宗教現象を、実定的宗教と呼んでいますが、このような名称の故に、大変不幸な争いが長い間続いてきました。もう一方でみなさんは、宗教一般に対して反感を持っているにもかかわらず、自然的宗教と呼ばれているものについては、常に寛容で、むしろ敬意をもってきたのではないでしょうか。私はここでみなさんに、躊躇することなく、私の心の中にある考えを述べてみたいのですが、私はみなさんがなしている自然的宗教に対するこのような選択には反対なのです。（中略）自然的宗教は、よく洗練されており、宗教的であるよりは、哲学的、道徳的な様相をもっているので、むしろ宗教固有の性格を輝かせることはあまりないかもしれません。自然的宗教は、エレガントに生きることを知っており、節制や順応を学んでいるので、どこでも、いつでも評判がよいのです。それに対して実定的宗教は、いずれの場合も大変強い性質と、非常に目立つ相貌を持っているので、ひと目見ればそれがどのようなものであるかをはっきりと認識できるのです。（中略）もしみなさんが、私が希望するとおり、宗教ということについて、さらに好意的な判断をし、人間の中には宗教についての固有の、高貴

な資質が備わっていることを認めるならば（それ故にそれが見出された時にはそれをいたわり、育てなければならないわけですが）、宗教が既に実際に現れ出ている特定の形態の中で宗教を直観するということを、みなさんが嫌がるということはあり得ないと思うのです。）（２３６～２３８頁）

実定的とは、今目の前にある形を取ったものということだ。神の場が心にあるということは、人間内部に自然に起きる心理に解消できるということではない。直観や感情は、心の（従って、人間の）外部から働きかけるものだ。しかし、シュライアマッハーを継承した19世紀の自由主義神学者たちは、外部に対する感覚を失ってしまい、主観的心理を神の意思と取り違えてしまった。その結果、１９１４年に第一次世界大戦が勃発し、未曾有の大量殺戮と大量破壊が起きた。21世紀の初めにわれわれは再び外部に対する感覚を取り戻す必要がある。『宗教について』はそのための基本書なのである。

お薦めの5冊

『ナショナリズムの歴史と現在』
E. J. ホブズボーム著、浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳、大月書店、2001年、3500円

『21世紀の資本』
トマ・ピケティ著、山形浩生・守岡桜・森本正史訳、2014年、みすず書房、5500円

『ユング心理学の世界』
樋口和彦、創元社、1978年、品切れ

『ナショナリズムの生命力』
アントニー・D・スミス著、高柳先男訳、晶文社、1998年、2800円

『ムッソリーニ――イタリア人の物語』
ロマノ・ヴルピッタ、ちくま学芸文庫、2017年、1400円

佐藤 優 （さとう まさる）
作家・元外務省主任分析官。1960年生まれ。同志社大学大学院神学研究科修了後、外務省入省。在英日本国大使館、ロシア連邦日本国大使館勤務を経て、外務本省国際情報局分析第一課で活躍。2002年、背任と偽計業務妨害容疑で逮捕され、2009年、最高裁で有罪が確定し失職。2013年、執行猶予期間が満了し、刑の言い渡しが効力を失った。2005年、『国家の罠』で毎日出版文化賞特別賞を受賞。著書は『自壊する帝国』（大宅壮一ノンフィクション賞）『神学部とは何か』『同志社大学神学部』『神学の思考』『神学の技法』ほか多数。

わたしと人文書

出口　治明

僕は、本については、「面白い本とそうではない本」、あるいは「数字・ファクト・ロジックに基づいた普通の本と、ためにするトンデモ本」の違いがあるだけだと思っている。だから、「人文書」とは何だろうと先ずその定義から考えてしまった。人文書とは、一般には、哲学・思想、宗教、心理、教育、社会、歴史の6つのジャンルに属する本を指すそうだ。なるほど。では、このジャンルの中から心に残っている本を何冊か挙げてみよう。

最近読んだ本では、呉座勇一『陰謀の日本中世史』。「本能寺の変」など歴史上の有名な事件を題材に、陰謀論や俗説の類を、逐一、木っ端みじんに論破していくさまが心地よい。この本の神髄は、専門家が陰謀論や俗説はそもそも議論に値しないと放置すればするほど陰謀論や俗説が蔓延り、それがフェイクニュースなどの温床になっていくと警鐘を鳴らしているところにある。その1つの代表例が「江戸しぐさ」であろう。現に書店の店頭を眺めれば、陰謀論やトンデモ本が溢れているのを誰しも目にする。これは、売らんかなという出版社の姿勢によるところも大きいと思うが、一番の原因は、専門家が無視を決め込んで論破する手間を惜しむところにある。これでは、土台、健全な社会は維持できないだろう。「誰かがネコの首に鈴をつけなければならない」

という思いでこの本を書き下した著者に深い敬意を捧げたい。1つの極論を述べれば、学者や専門家の社会貢献の最たるものは、ためにするトンデモ本を社会から一掃するところにあるのではないか。

次に、ジョナサン・フェンビー『奇妙な同盟』。第二次世界大戦後の世界が、ルーズベルト、スターリン、チャーチルのビッグスリーが描いた見取り図に沿って歩んだことは、ほぼ定説になっている。その意味で、この本には目新しいことは何もない。それにもかかわらず、この本はとにかく面白い。なぜか。それは、圧倒的な量の多数の関係者の肉声や証言を丁寧に積み重ねることによって、3巨頭がまるで僕たちの目の前を歩いているかのような存在感で蘇るからだ。ウィルソンの二の舞はしないと戦後世界のグランドデザインに思いを巡らすルーズベルト、ソ連の権益と東欧での勢力圏確保にしか興味のないスターリン、大英帝国の延命をひたすら図ろうとするチャーチル、そこにいるのは伝説と化したリーダーではなく、僕たちと同じ強みや弱みをもち、普通の肉体と感情を持つ生身の人間なのだ。感傷的になってはよく涙を流すチャーチル、何故かスターリンに親愛の情を示すルーズベルト、夜更けまで宴会をやめないスターリン、まさに、「神は細部(ディテール)に宿る」のだ。この本の素晴らしいところは、3巨頭だけではなく、脇役の造形、彫琢にも細心の注意が向けられているところにある。大戦の帰趨を決めたレンドリース法の策定などに重要な役割を果たした大統領の側近のハリー・ホプキンス、重厚でこれほど肩

書に相応しい人格も少ないだろうと思わせるアラン・ブルック大英帝国陸軍参謀総長、登場場面こそ少ないものの強烈なオーラを放つ宋美齢蔣介石夫人、傲岸不遜のドゴール将軍など枚挙に暇がない。書き手の筆力が冴え渡る1冊だ。

中東の混迷などにより、イスラーム世界が再び世間の注目を集めている。ところで、イスラーム教ほど人口に膾炙しているにもかかわらず、その実態が誤解されている宗教は少ない。イスラーム教は商人が生んだ極めて合理的な宗教なのに、いまだに「砂漠に生まれた峻厳な宗教」などと平気でコメントする評論家がいるほどだ。カレン・アームストロング『ムハンマド』は、イスラーム教の開祖、ムハンマドの生涯を描いた優れた評伝である。著者はローマ教会の修道女であった人で、それだけにイスラーム教の本質がよく理解できるのだろう。なぜなら、イスラーム教は、他の2つのセム的一神教(ユダヤ教とキリスト教)と神を同じくする宗教だからだ。この本に描かれたムハンマドはとても人間味に溢れた人物だ。世界の三大宗教と呼ばれるのは、一般には、仏教、キリスト教、イスラーム教だが、それぞれの開祖を比較すると、ブッダとキリストは共に世捨て人の範疇に数えられるだろう。これに対してムハンマドは商人であって後に市長や軍司令官をも務め、愛妻に看取られて自宅で天寿を全うした人間である。その人が啓いた宗教が平易で合理的なのは、考えてみればごく自然なことだろう。イスラーム以前の社会は「ジャーヒリーヤ」(無明時代)と呼ばれたが、この言葉の第一義は「怒りっぽい気質」、傲慢さや慢性的に暴

力と報復を行う傾向であり、クルアーンはこれに対してヒルム（堪忍）をもって行動するように促した。また、ジハードは本来、社会と心を改革するための奮闘を指す言葉であって、クルアーンは、武力衝突の間でさえも、絶えず慈悲と寛容の大切さを主張している。加えてクルアーンは、ほとんどの欧米の女性たちが19世紀まで享受することができなかった法的地位を女性たちに与えようとしていたのである。この本は、イスラームを理解するには、最適の1冊であろう。

小坂井敏晶『社会心理学講義』。僕は、「花には香り、本には毒を」という言葉が大好きだ。読み終えた後に、何らかの違和感、即ち毒素が体の中に残らない本はそもそもつまらないではないか。全ての学問は常識を疑うところから始まるが、この本はページを捲る度に、僕たちの常識が強烈なハンマーの一撃で粉々にされてしまう。幾つか拾ってみよう。「真理はどこにもない」「正しい社会の形はいつになっても誰にもわからない」「人格や意思が行動を決定するという西洋近代が生み出した個人主義的人間像は人間の実情に合っていない」「異質性よりも同質性の方が差別の原因になりやすい」「伝統は後の時代に脚色された虚構」、そして「日本の西洋化の背景に見るべきは、新しい物好きで好奇心旺盛な模倣者ではなく、荒々しい野生の外部を馴致された〈外部〉とすり替えて内部化する奇術師の姿でしょう」等々、小坂井ワールドが炸裂する。読者は、嫌でも自問せざるを得ない。これは本当なのか、と。そして、自分と向き合うチャンスが与えられるのだ。「本当に大切なのは自分自身と向き合うことであり、その困難を自覚すること、それ

だけです」と著者は言い切る。ビジネスが、人間と人間が作る社会を対象とするものである以上、人間と社会に深く切り込んだこの本は、近年最高のビジネス書の1冊と呼んでいいだろう。

最後に、ロバート・D・パットナム『われらの子ども』を挙げたい。わが国ではシングルマザーの家庭を中心として、子どもの実に6人に1人が貧困に喘いでいる。このまま放置すると、社会的損失は40兆円に達するとの試算もある(『子供の貧困が日本を滅ぼす』)。この本は、アメリカにおける子どもの貧困と格差の固定という社会的危機の現実を赤裸々に描き出した力作だが、その手法が素晴らしい。先ず豊かさと貧しさなどコントラストの激しい具体的なエピソードを取り上げ、豊富な統計データを用いてそれを1つずつエビデンスで裏付けていくのだ。わが国では、エピソードが中心で統計的なエビデンスに欠ける書物が多々出版されているが、他山の石とすべきであろう。「何をすべきか」と題された終章は重い。貧しい子どもの面倒を見る責任は、われら世界の大人全てが負っているのだ。子どもの貧困に関心を持つ全ての心ある人に、ぜひ一読してほしい良書だ。子どもたちこそが僕たちの未来なのだから。

お薦めの５冊

『革命――仏大統領マクロンの思想と政策』
エマニュエル・マクロン著、山本知子・松永りえ訳、ポプラ社、2018年、2700円

『教養としての社会保障』
香取照幸、東洋経済新報社、2017年、1600円

『ロレンスがいたアラビア』（上・下）
スコット・アンダーソン著、山村宜子訳、白水社、2016年、各巻2800円

『1493――世界を変えた大陸間の「交換」』
チャールズ・C・マン著、布施由紀子訳、紀伊國屋書店、2016年、3600円

『第二次世界大戦1939-45』（上・中・下）
アントニー・ビーヴァー著、平賀秀明訳、白水社、2015年、各巻3300円

出口 治明 （でぐち はるあき）
立命館アジア太平洋大学（APU）学長。1948年三重県生まれ。京都大学法学部卒業後、日本生命保険相互会社に入社。ロンドン現地法人社長、国際業務部長などを経て2006年に退職。2008年にライフネット生命保険株式会社を開業。10年間社長、会長を務めた後、2018年1月より現職。主な著書に、『生命保険入門 新版』（岩波書店、2009年）、『人生を面白くする 本物の教養』（幻冬舎新書、2015年）、『「全世界史」講義Ⅰ・Ⅱ』（新潮社、2016年）、『0から学ぶ「日本史」講義 古代篇』（文藝春秋、2018年）など多数。

ソウルフルな人文書

ブレイディ　みかこ

「紀伊國屋じんぶん大賞ベスト30」のリストに拙著が選ばれたとき、嬉しいというより、正直、わたしは当惑した。

「わたしの本が、なんで人文書なんだろう」

という基本中の基本というか、素朴な疑問が浮かび上がってきたからだ。

ある編集者さんはこう言った。

「弊社も何が人文書なのかもはやわからなくなっています(笑)」

別の出版社の編集者さんはこう言った。

「他のジャンルがしっくりこないからじゃないですか。人文書は間口が広いから」

一番具体性があったのは、次の意見だった。

「とりあえず、ノンフィクションだからじゃないですか」

でも、英語の書籍だと、大きなカテゴライズは「フィクションか、ノンフィクションか」ということしかない。書店に行っても、この二つで売り場が分かれていたりする。だから、ノンフィクションがすべて人文書ということになったら、世に出回っている書物の半分はそうだというこ

とになってしまう。

この説はさすがに違うだろう、と思った。

いったいぜんたい、英語で人文書って何て言うんだろう、とグーグル翻訳してみたら「ヒューマン・ドキュメント」と出てきて、そりゃあんまりだろうと笑ったが、「人」の字があるから「ヒューマニティーズ」かなと思った。が、「ヒューマニティーズ」のカテゴリーには文学、すなわち小説や詩なども入っているので、やはり人文書とは違う気がする。

ということは、「ヒューマン・サイエンス」のほうが近いのかしら、と思ったり、でもそれより日本の人文書の枠のほうが幅広い気がするので、要するに「ヒューマニティーズ」マイナス文学のことなのだろうか。と考え込んだりして、人文書をテーマに書けと依頼されたわりには、人文書というものが何なのかわかっていないという初歩的な問題を抱えている。だからここでわたしが語る本が人文書に分類されるのかどうかは心もとないが、拙著が人文書ならば、これから挙げる本もそうだと思うのでひるまずに書き進めたい。

これまでの人生で少なくとも50回以上は読み返し、いまでも自分の執筆活動は常に何処かからこの作品に監視され、遠隔操作されていると思う本がわたしにはある。

ジャック・ロンドンの『どん底の人びと――ロンドン1902』である。

若い頃にこの本にぶっ飛ばされ、その勢いでジョージ・オーウェルの『パリ・ロンドン放浪

記』も読んだ。以来、この二作はわたしの中で双璧になっているが、どちらがわたしにとってより重要かと問われたら躊躇せず『どん底の人びと』と答える。

同作はカテゴリー的にはルポルタージュと呼ばれる。１９０２年にロンドンの労働者階級の居住地域、イースト・エンドに侵入したジャック・ロンドンが、当時の貧困層の人々の生活の中に入り込み、その現状を赤裸々に報告したものだ。オーウェルは十代の頃に『どん底の人びと』を読んで大きな影響を受け、ジャック・ロンドンを真似て貧困区に侵入して『パリ・ロンドン放浪記』や『ウィガン波止場への道』を書いたと言われている。

『パリ・ロンドン放浪記』もたいそう面白く、ルポルタージュとして非常に優れた作品だし、彼の『一九八四年』と併読されるべき一冊であると思う。しかし、『どん底の人びと』のほうがわたしにとって特別なのは、この本は果敢にもルポ以上の領域に突っ込んで行っているからだ。

純粋なルポの部分も十分に秀逸だし、当時の労働者階級の貧困の現実を伝える貴重な記録だ。胸打たれるのは、ジャック・ロンドンが米国のミドルクラス出身の青年として英国の貧民街に飛び込み、そこで目にしたものへの衝撃と恐怖感、嫌悪感までをはっきりと書き残していることだ。いわゆるフィールドワークのような中立性を持たず、調査ではなく体験として書いているので、当時のミドルクラスと底辺階級の生活水準や意識の絶望的な格差がくっきりと浮かび上がっている。

だが、この作品がルポを超えたものになるのは最終章に向かってだんだん著者の視点がずれて

いく部分だ。ここでジャック・ロンドンは、「ストリートの日常」というミクロから、自分が見たものがどう英国全体の、そして世界の政治・社会状況と繋がっているのか、ロンドンの貧民街での自分の経験はけっして個人的なものではなく、社会という巨大な全体の一部なのだというマクロの視点で語り始める。しかもそれが、おそらく最初から作品の構成として考案されていたわけではなく、単なる潜入ルポとして書き始めたのに、凄まじい現実を体験するにつれて激しい憤りを感じ、それが押さえられなくなって「マクロに向かわざるを得なくなった」と読み手に思わせる力をもって迫ってくるのだ。

この点が、『パリ・ロンドン放浪記』よりも『どん底の人びと』のほうが特別な位置づけになっている理由だ。確かにミクロの視線を貫いた前者に比べると後者はバランスが悪いし、どこか不格好だ。しかし、ミクロとマクロの両方をやろうとした(おそらくは、やらずにいられなくなった)『どん底の人びと』は、それだからこそ新たな地平を開きに行った別格の作品なのである。

『どん底の人びと』は単に読者に情報や知識を提供する本ではない。これは頭ではなく、「腹に来る本」だ。例えばジャック・ロンドンが百年前の労働者たちを見て書いた次のような文章は、格差と貧困の時代と呼ばれるいまこそ読まれるべきであり、その考察は少しも古びていない。

「倹約せよ」、というのは労働者が賃金以下の支出をすること、つまり、賃金以下で食べてゆくことを意味する。これは生活水準の低下に等しい。仕事を求めて必死に競っている場合、

生活水準を落としている者の方が上の水準の者より有利になる。そういう倹約している労働者が人が余り気味の工場にわずかでもいれば、その工場の賃金は下がる一方になる。

こうした指摘はデフレに苦しんできた現代の日本の人々の腹にも来るはずだ。

最終章の冒頭で、ジャック・ロンドンは、「社会的などん底をなるべく広い視野から考え、『文明』に対していくつかの質問を浴びせる」と宣言する。そして、その質問の一つは「果たして文明は人間の生活を向上させたか？」である。彼は言う。ここでの「人間」とはあくまでも「普通の人」であり、ゆえに彼の問いは「果たして文明は普通の人の生活を向上させたか？」ということなのだと。

逆に言えば、貧困というミクロな状況を調査する者は、その現実に憤るなら、文明の「末端」にいる者たちを苦しめている文明の「システム」を疑うようにならなければならないと結論しているのである。つまり、普通の人々の生活をより良いものにできなければ、研究や報告に何の意味があるのかとブチ切れているのだ。

この熱さが『どん底の人びと』をソウルフルな書物にしているものの正体だ。

人文書とはそんな暑苦しいものではない、と言われたらそれまでだが、この作品はオーウェルだけでなく、後世の多くの学者や作家に読まれ、影響を与えてきたのだから、やはり何か特別な力があるのだろう。そして学問や理論について書いた書物が、この熱い力と相反するものである

必要はないとわたしは思うのだ。

ソウルフルな人文書。

わたしが読みたいのはそういう本だ。そして（拙著が今後も人文書に分類され続けるのであれば）書きたいと切望するのもそういう本なのである。

お薦めの５冊

『どん底の人びと――ロンドン1902』
ジャック・ロンドン著、行方昭夫訳、岩波書店、1995年、品切れ

『パリ・ロンドン放浪記』
ジョージ・オーウェル著、小野寺健訳、岩波書店、1989年、780円

『ハマータウンの野郎ども――学校への反抗・労働への順応』
ポール・ウィリス著、熊沢誠・山田潤訳、ちくま学芸文庫、1996年、1450円

『街の人生』
岸政彦、勁草書房、2014年、2000円

『われらの子ども――米国における機会格差の拡大』
ロバート・D・パットナム著、柴内康文訳、創元社、2017年、3700円

ブレイディ　みかこ

英国・ブライトン在住の保育士・ライター・コラムニスト。著書に『ヨーロッパ・コーリング』（岩波書店）、『THIS IS JAPAN』（太田出版）、『子どもたちの階級闘争』（みすず書房）、『労働者階級の反乱』（光文社新書）などがある。

「ほんと」と「つもり」のあいだ

松岡 正剛

学生時代に読んだヴァレリーの『テスト氏』が震撼とさせた。何が震撼とさせたかというと、ヴァレリーが雷鳴の夜に脳髄に一撃を食らったことが直接に伝播したのである。読書というものは、中身を咀嚼することで読み手の何かが充実するとはかぎらない。著者が遭遇した知的体験のいきさつがそのまま伝わってくるときにも、大いに起動する。とくに著者が当初の探究軌道から逸れて、そこから何かが零れてくるとき、その零れ方が読み手にも伝わってくると、読書は俄然いきいきしたものになる。ヴァレリーのときはそういうことがおこった。

どんなときにその本を読んだかということも、大いに関係がある。新宿で土方巽の舞踏を見た直後に読み始めたベンヤミンの『パサージュ論』にはビリビリきたが、『ブレードランナー』を見たら、そのときちょうど読みさしだったベルクソンの『物質と記憶』が色褪せてきた。こういうことはしょっちゅうある。失恋をしたか邪神に憧れた前後なら、ヘッセの『デミアン』や梶井の『Kの昇天』はどんぴしゃなのだ。

だいたい読書は野球でいうなら打率三割で当たればいいところ、ピッチャーである著者のクセ球が打てなかったからといって、しょげる必要がないし、ポンポン当たればそれはその著者がへ

ボだということなのだ。読書というものはそもそも蹈鞴を踏むためにあるのだし、世界に対する逡巡がいとおしくなるためにある。いつも得点をあげようとするのは、あまりにさもしい。迷ってナンボ、ひらめいてナンボ、空振り三振してナンボなのである。

学問だって、そういうものだ。知というものは学問的な道筋をコンシステントにつなげたからといって、そのコースの通りに興奮できるようにはなっていない。知の発動は幼児期の好奇心に始まっているのだし、自分を触発してくれた先達や書物や事件や道端の野花によって右往左往するものだ。その右往左往するプロセスの多様性や多重性の中で感知され、抱握されていくものが、愉快な知というものなのである。

二〇一五年六月八日の文科省による「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」という通達には呆れた。教員養成系と人文社会科学系の学部や大学院を縮小するか整理しなさいというのだ。日本には一度は六〇年代後半に、二度目はバブル期前後の頃に、いちじるしい教員軽視と人文軽視の傾向が強くなっていたけれど、これはいよいよもっての末期症状だ。

反知性主義の蔓延がここまできたのか、教養とは何かということがとことん忘れられたのか、理科合理主義で人がつくれると思っているのか、原因はいろいろだろうが、情けない。

もっとも、アカデミズムの領域が学問世界や知識世界をいまだに自然科学とか人文科学とか、

哲学とか物理学とか心理学とかと分けているのも、もはや何の力ももっていないし、そんな旧来の分野に律儀にかかわるのも億劫だと思うべきなのである。本読みが半ば仕事になっている私からすると、たいていの興味深い本は天文書であってかつ人文書であり、また地文書であって知文書で、かつまた世文書であって芸文書なのだ。私が二十代に熱中したライプニッツからホーキングまで、寺田寅彦からカイヨワや湯川秀樹まで、鈴木大拙からポアンカレやフーコーまで、みんな、そういう天・地・人・知・世・芸をまたいだものだった。なぜ、そうなのか。知の興奮はそもそもコンシステントにはやってこないからである。

だから文科省だけではなく、大学や入試問題や中等教育もおかしかったのである。既存の学知をタテに割ったまま、その分割された領分のコンシステンシーにこだわりすぎてきた。

二年前、頼まれて東大阪の近畿大学に「ビブリオシアター」という図書館をつくった。一階は「ＮＯＡＨ33」と名付けて図書分類をまったく無視した33の本棚フェイスによる本を並べた。「大地と海が生きている」「脳と心と体の関係」「国と人を守るしくみ」「売ります・買います・起こします」「神々と仏の教え」「注目すべき個性たち」といった33フェイスだ。二階は「どんでん」と銘打ってマンガ本と新書をくっつけて36フェイスに組み立てた。「異形との出会い」「文化部が教えてくれること」「革命ごっこと戦争ゲーム」「裁判長にもの申す」「ホラーにはまりたい」「どついたるねん」などとした。

これらはタテの分類でもヨコの分類でもない。学生が本を手にとるための動機と本がもつ力とをタテ・ヨコ・ナナメに組み合わせた。来館者数は開館八カ月で一〇〇万人を突破した。

本は着脱するものである。だから図書館や書店にはフォーマルスーツもスカートもあるし、下着のような本やTシャツのような本もある。革靴もスニーカーもサンダルもある。

読書するとは、これらを好きに着脱することだ。着ようとしてばかりではよろしくない。脱ぐことも着替えることも大事だ。下着本ははやめに取り替えたほうがいいし、靴と靴下は合わせたほうがうまくいく。私はたいてい数冊ずつを選んでその日やその一週間のコーディネーションをたのしむ。

しかし、本はあまりにも大量にある。これを見分けるのがふつうは嫌になる。どこで見分けるか。本のタイトル、著者、ブックデザイン、帯の惹句、版元その他もろもろが目印になるが、私は目次を見ることを勧めている。どんな本も編集がかかわっているのだが、著者の意図と編集の感覚が掛け合わさってレシピ状になっているのが、なんといっても目次なのである。たいてい力が注がれている。ここに目をつけない手はない。書店で本を手にしたら、まずもって目次を見るといい。せいぜい一分か三分ですむ。

もうひとつ、ぜひとも言っておきたいことがある。学問や読書には「真理」や「真実」を見せ

てくれる保証など、必ずしもちゃんと備わってはいないということだ。そういう探索が成就されているものはあるけれど、もっと自在になったり一人よがりになっているほうが多い。私は最近『擬(もどき)』(春秋社)という本を書いたけれど、そこでいちばん強調したことは、どんなにすぐれた知も体系も「ほんと」と「つもり」の区別はつけられないということと、世界も自分も「ちぐ」(鎮具)と「はぐ」(破具)のあいだにいるしかないということだった。

とくに人文書は「ほんと」と「つもり」を頻繁に往来する。そもそも、歴史が「つもり」の歴史であったのか「ほんと」の歴史であったのか、なかなか区別はできない。カエサルも義満も、ワット・タイラーの乱もフランス革命も、王仁三郎も西部邁も、「つもり」のほうが多かった。そのどちらかを見極めようとするのではなく、人文読書は「ほんと」と「つもり」のあいだで好きに遊んでみることだ。

お薦めの5冊

『確実性の終焉――時間と量子論、二つのパラドクスの解決』
イリヤ・プリゴジン著、安孫子誠也・谷口佳津宏訳、みすず書房、1997年、4300円

『全体性と内蔵秩序』
デヴィッド・ボーム著、上忠・伊藤笏康・佐野正博訳、青土社、2005年、2800円

『考える／分類する――日常生活の社会学』
ジョルジュ・ペレック著、阪上脩訳、法政大学出版局、2000年、2000円

『合理的な愚か者――経済学＝倫理学的探究』
アマルティア・セン著、大庭健・川本隆史訳、勁草書房、1989年、3000円

『禅への鍵〈新装版〉』
ティック・ナット・ハン著、藤田一照訳、春秋社、2011年、2000円

松岡 正剛 （まつおか せいごう）
1944年生まれ。編集者、著述家、日本文化研究者。編集工学を提唱。京都市出身。東京大学客員教授、帝塚山学院大学教授を歴任。現在、株式会社松岡正剛事務所代表取締役、編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。主著に『17歳のための世界と日本の見方――セイゴオ先生の人間文化講義』(2006年)、『連塾 方法日本』(全3巻、Ⅰ 2008年、Ⅱ 2009年、Ⅲ 2011年)、共著に『意身伝心――コトバとカラダのお作法』(2013年)、『匠の流儀――経済と技能のあいだ』(2015年、いずれも春秋社)ほか多数。

詩と出会う

若松 英輔

ある日、群馬県の高崎市でタクシーに乗った。行先は、歌人で万葉学者でもあった土屋文明の名前を冠する文学館(県立土屋文明記念文学館)で、駅から車でも三十分ほどかかる場所だった。運転手は、私に姉がいたらというほどの年齢の女性で、そんなところに何をしにいくのかという。

目的は、群馬県に生まれた詩人大手拓次(一八八七〜一九三四)の展覧会だった。この詩人は、北原白秋、萩原朔太郎と同時代人で、彼らにも詩人としての力量を高く認められ、多くの詩を書いたが、生前は詩集を出さずに亡くなった。没後二年、遺稿集『藍色の蟇(ひき)』が刊行された。

大手拓次は、広く知られている詩人ではない。しかし、近代日本を代表する詩人である。表現者として秀でていただけでなく、詩学、すなわち詩の生成と発展のことわりを語り得る稀有な人物の一人だった。「しなびた船」と題する作品には、深甚なる悲願が描きだされている。

海がある、
お前の手のひらの海がある。
苺(いちご)の実の汁を吸ひながら、

わたしはよろける。
わたしはお前の手のなかへ捲きこまれる。
逼塞(ひっそく)した息はお腹(なか)の上へ墓標(はかじるし)をたてようとする。
灰色の謀叛よ、お前の魂を火皿(ほざら)の心(しん)にささげて、
清浄に、安らかに伝道のために死なうではないか。(『大手拓次詩集』)

この詩人にとって詩作とは、人々の心の奥に詩情を届ける「伝道」だった。彼はボードレールを愛し、キリスト教、ことにカトリックの霊性を深く理解していたが、彼の詩情のほとばしりはそこに収まらない。宗教という地平を超えたところで人と人、人と世界を和解させるはたらきを持つものだった。次の詩には、どこまでも民衆の心に寄り添いたいという、プロレタリア文学の先駆者の面影をかいま見るような心地がする。

一人の生きるために、
万人の生きるために、
民衆のうへにみどりの火をかざせ。

一人の死をとむらふために、
万人の死をとむらふために、
民衆のうへに青銅の鉦(かね)をならせ。

詩人はイデオロギーから自由でなくてはならない。むしろ、さまざまなものと共振できる空間を己れの内界に蔵していなければならない。民衆を本当の意味で救うのは、パンではない。魂を浄める「みどりの火」がいる。死者となった個々の民衆に慰めを送るために必要なのは儀礼だけではない。切なる祈りによって鳴らされる「青銅の鉦」がなくてはならない、というのである。

運転手の女性は、大手拓次の名前を聞いたことがないと言い、地元にそんな人がいるとは何か誇らしい感じもするとも語った。しかし、すぐあとで彼女は、胸につかえていた何かを吐きだすようにこう話し始めた。

「私は、詩が嫌い。だって詩というのは、自由に読んじゃいけないんでしょ?」

語調は、客と運転手で交されるものよりも、もっと砕けたものだった。話しぶりから詩をめぐって、ある種の恨みに似た思い出があるのはすぐに分かった。

小学生のとき彼女は、授業である詩を読んで、強く動かされる。それまでにない種類の感動で、その喜びは今も鮮烈によみがえってくるというほどだった。授業中に、たまたま教師から感想を

聞かれ、湧き上がるおもいを制御できないまま語る。すると言下に、それは間違っている、と断定された。それ以来、詩も国語も嫌いになったという。

詩とはそもそも、言葉では捉えられないものを、言葉で示そうとする営みだから、その感想を口頭で言わせようとする行為には、根本的矛盾がある。さらに教師は、女性が語ったことに気を取られ、彼女が詩に感動し、言葉にならないおもいと共にあることを完全に見過ごしている。

「それは本当に大変な思いをされましたね。しかし詩は、文学のなかでもっとも自由に読んでいいものだと思います。ことに詩の場合、正しい読み方、というのは存在し得ないと思います」と言うと、この女性は、少し驚いた様子で、さらに小学生の頃の感動をいきいきと語り始めた。

しばらくして目的地に着いた。

「お帰りはどうなさるのですか」と彼女が言う。

「また、タクシーを呼びます」と応えると、メータを止めるから待っていてもよいかと言う。もう少し話したいことがある、と彼女は言葉を添えた。

展覧会を見終えて戻ってくると、この女性は、今まで胸にしまっておいたことを告白するようにこう語り始めた。

「小学校のときに先生に違う、って言われて、詩も国語も嫌いになって、ついでに勉強もあまり好きじゃなくなったんです。でも、わたし、じつは文章を書くのが好きなんです。それで書い

ているうちに、自分が書いているのはもしかして、詩じゃないかと思うこともあるんです」

タクシー運転手になる以前、この女性は長く幼稚園で仕事をしてきたという。そこで短くない期間を過ごしたが、知り得る範囲ですべての卒園者に年賀状を送り続けている。次第に少なくなっていくのだが、それでも四百枚ほどになる。一枚一枚、手書きで、年賀葉書の発売開始の時期から始めて、およそひと月を費やして完成させる。一回だけ、住所は手書きだが、文章は印刷にしてみたこともあったが、まったく別なものになり、すぐに手書きに戻した。書いている時間がもっとも充実していたのに、そこを短くして楽をしてみたが、何もいいことはなかった、むしろ、虚しさを手にすることになった、と語った。

「一つ一つ、絵と文章を書いていると、何か祈るような気持ちになるんです。そうした気持ちで書いていると、ふと、思いもしなかった美しい言葉が、どこからともなくやって来るんです」

この言葉を聞いたときの何か戦慄にすら似た感動を忘れることができない。ここにも隠れた詩人がいると思った。

もちろん、文面を見たことなどない。しかし彼女が無心で、一枚一枚に心を込めて書いている文章には、知られざる詩歌が眠っているに違いないと確信した。言葉の深み、哲学者の井筒俊彦がいうコトバと親しく交わった者のみが放つことのできる響きが、彼女の言葉にはあった。

「このまま書き続けてもいいのでしょうか。私はじつは誰も読んでいないものを書いているん

じゃないでしょうか」と彼女は言う。

人は、書いているときに自分で読んでいる。書くとは、自分の心の奥、古人が「魂」と呼んだ場所とコトバとの往復運動を体感することにほかならない。私たちは他者のために書くという動機のもとに書き始め、ついには己れの心の深みにあるものと出会うのである。

詩は、さまざまなところで紡がれている。詩は、世に詩人と呼ばれる人によってのみ生み出されるわけでもない。先の女性のように、形式としての詩をめぐって複雑な感情をもったまま日々の生活を送りつつ、気づかぬところで詩情との交わりを深めているような人も少なくない。また、『苦海浄土――わが水俣病』を書いた石牟礼道子（一九二七～二〇一八）のように、自らは詩人を名乗らない詩人もいる。

市井の人が書いた忘れがたい詩集がある。『白い木馬』と題する一冊集で、作者はブッシュ孝子（一九四五～一九七三）という。この人物の名を初めて認識したのは、神谷美恵子の『こころの旅』である。神谷が著しい共感をもって彼女の詩を一度ならず引用しているのに出会った。

確かにブッシュ孝子の名前を認識したのはこのときなのだが、彼女の言葉にふれたのは、それよりもずっと以前、まだ二十代の前半に河合隼雄の『影の現象学』を手にしたときだった。のちに詩の世界に没入していく準備はなされていたのである。

彼女は病のため二十八歳で亡くなる。残された日々に限りがあることを明確に認識したとき、

何ものかに促されるようにしてペンを執った。実際に詩を書いたのは、亡くなる四ヶ月ほど前のひと月ほどでしかない。亡くなって二年後、遺稿が『白い木馬』の題下で刊行された。

鮮烈な印象を覚えた詩はいくつもあるのだが、なかでも「私には愛について語ることなどはできない」は、愛をめぐる原経験の一つといってよいほどの衝撃を残した。今もそれは生き続けている。その言葉は、愛を思想として論じた幾多の論考よりもずっと精緻に、また熱情を伴って「愛」の実相を活写しているように感じられる。

私には愛について語ることなどはできない
それでも時々
私をみつめるあなたのひとみの中に
これこそ　愛というものをみることがある
あなたの力強い手の力に
これこそ　愛なのだと心さわぐことがある

愛に「ついて」語る言葉は持たない。しかし、愛が何であるかは全身で感じている。愛「を」たしかに生きている、というのである。静止した言語で語ろうとすれば、すべて偽りになるとい

うほど、熾烈に躍動している。

彼女の詩は、愛が何かを語らない。しかし、愛は、私たちの心の深部にも、あかあかと焔が燃えるように存することを静謐のうちに告げ知らせているのである。

お薦めの５冊

『こころの旅　神谷美恵子コレクション』
　神谷美恵子、みすず書房、2005年、1600円

『意識と本質　一九八〇－一九八一年』
（井筒俊彦全集 第六巻）
　井筒俊彦、慶應義塾大学出版会、2014年、6000円

『詩魂』
　高銀・石牟礼道子、藤原書店、2015年、1600円

『影の現象学』
　河合隼雄、講談社学術文庫、1987年、1080円

『大手拓次詩集』
　原子朗編、岩波文庫、1991年、950円

若松 英輔 （わかまつ えいすけ）

批評家・随筆家。1968年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。2007年「越知保夫とその時代――求道の文学」にて三田文学新人賞、2016年『叡知の詩学――小林秀雄と井筒俊彦』（慶應義塾大学出版会）にて西脇順三郎学術賞、2018年『詩集　見えない涙』（亜紀書房）にて詩歌文学館賞受賞。著書に『イエス伝』（中央公論新社）、『生きる哲学』（文春新書）、『言葉の贈り物』『常世の花　石牟礼道子』（亜紀書房）など多数。

人文会

会 員 社 紹 介

平和と民主主義、社会進歩に寄与するために

大月書店

◆ 創業：1946年
◆ 主な出版ジャンル：思想・歴史・社会・経済・教育
◆ 代表的な刊行物：『マルクス＝エンゲルス全集』（全53巻）1959～1991／『従軍慰安婦資料集』吉見義明編集・解説 1992／『講座 現代日本』（全4巻）渡辺治・後藤道夫編 1996～97／『茶色の朝』パヴロフ物語・ギャロ絵 2003／『認知症になった私が伝えたいこと』佐藤雅彦 2014

学術専門書を刊行して70年

御茶の水書房

◆ 創業：1948年
◆ 主な出版ジャンル：哲学・思想・経済学・社会学・歴史学
◆ 代表的な刊行物：『アダム・スミスの倫理学』田中正司 2017／『フリードリヒ・シュレーゲルの「生の哲学」の諸相』酒田健一 2017／『庄内稲作の歴史社会学』細谷昂 2016／『中国残留日本人孤児の研究』浅野慎一・佟岩 2016／『経済原論』菅原陽心 2012／『留学生派遣から見た近代日中関係史』大里浩秋・孫安石 2009

時代を超えて読み継がれる本を

紀伊國屋書店

◆ 創業：1927年
◆ 主な出版ジャンル：哲学・思想・歴史・心理・自然科学
◆ 代表的な刊行物：『娘時代』S. ボーヴォワール 1961／『愛するということ』E. フロム 1991／『利己的な遺伝子（増補新装版）』R. ドーキンス 2006／『経済は感情で動く』M. モッテルリーニ 2008／『正義論（改訂版）』J. ロールズ 2010

知的創造・文明の継承活動の成果を発信

慶應義塾大学出版会

◆ 創業：1947年
◆ 主な出版ジャンル：人文・社会・法律・経済・芸術
◆ 代表的な刊行物：『レポート・論文の書き方入門 第4版』河野哲也 2018／『井筒俊彦全集』（全12巻＋別巻1）2013～2016／『人手不足なのになぜ賃金が上がらないのか』玄田有史編 2017／『芸術の言語』ネルソン・グッドマンほか 2017

真理と自由のために

勁草書房

◆ 創業：1948年
◆ 主な出版ジャンル：哲学・社会・教育・法律・経済・政治
◆ 代表的な刊行物：『都市の論理』羽仁五郎 1968／『構造と力』浅田彰 1983／『女という快楽』上野千鶴子 1986／『書物としての新約聖書』田川建三 1997／『戦争の論理』加藤陽子 2005／『なめらかな社会とその敵』鈴木健 2013／『街の人生』岸政彦 2014

伝統を基に新しい時代に向かって

春秋社

◆ 創業：1918年
◆ 主な出版ジャンル：宗教・哲学・思想・心理・社会・文学・芸術
◆ 代表的な刊行物：『中村元選集 決定版』全40巻（別巻含む）1988／『それでも人生にイエスと言う』V. E.フランクル 1993／『17歳のための世界と日本の見方』松岡正剛 2006／『ピアニストの脳を科学する』古屋晋一 2012

犀のマークでお馴染

晶文社

◆ 創業：1960年
◆ 主な出版ジャンル：思想・社会・文芸・芸術
◆ 代表的な刊行物：『数の悪魔』エンツェンスベルガー 1998／『考える練習をしよう』マリリン・バーンズ 1985／『たんぽぽのお酒』ブラッドベリ 1971／『写真論』ソンタグ 1979／『こわいもの知らずの病理学講義』仲野徹 2018

こころの専門家をめざす人へ

誠信書房

◆ 創業：1955年
◆ 主な出版ジャンル：心理・宗教・福祉
◆ 代表的な刊行物：『新・佛教辞典』中村元監修 1962／『カウンセリングの実際問題』河合隼雄 1970／『カウンセリングの理論』國分康孝 1980／『誠信 心理学辞典』外林大作ほか編 1981／『影響力の武器』R. B.チャルディーニ 1991

新しい価値観の創造

青土社

◆ 創業：1969年
◆ 主な出版ジャンル：哲学・思想・文学・詩・批評・心理・脳科学・科学
◆ 代表的な刊行物：『ユリイカ』1969～／『現代思想』1973～／『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』谷川俊太郎 1975／『ものぐさ精神分析』岸田秀 1977／『北欧神話物語』キーヴィン・クロスリイ＝ホランド 1983／『唯脳論』養老孟司 1989／『免疫の意味論』多田富雄 1993／『暴力の人類史』(上・下) スティーブン・ピンカー 2015

良書永続

創元社

◆ 創業：1892年
◆ 主な出版ジャンル：心理学・歴史・宗教・ビジネス・芸術・自然科学・実用
◆ 代表的な刊行物：『人を動かす 全訳』D. カーネギー 1958／『世界で一番美しい元素図鑑』S. グレイ 2010／「戦後再発見」双書 2012～／『プロカウンセラーの聞く技術』東山紘久 1999／『翻訳できない世界のことば』E. F. サンダース 2016

物事の本質をつかむ

筑摩書房

◆ 創業：1940年
◆ 主な出版ジャンル：文芸・社会・人文・サイエンス・実用
◆ 代表的な刊行物：『世界古典文学全集』1964刊行開始／『現代日本文学大系』1968刊行開始／『思考の整理学』外山滋比古 1986／『金持ち父さん貧乏父さん』ロバート・キヨサキ 2000／『日本近代史』坂野潤治 2012

学問の普及、学術の振興を図る

東京大学出版会

◆ 創業：1951年
◆ 主な出版ジャンル：人文社会科学、自然科学
◆ 代表的な刊行物：『線型代数入門』齋藤正彦 1966／『統計学入門』東京大学教養学部統計学教室編 1991／『知の技法』小林康夫・船曳建夫編 1994／『大人になるためのリベラルアーツ』石井洋二郎・藤垣裕子 2016

これからも社会と向き合う

日本評論社

◆ 創業：1918年
◆ 主な出版ジャンル：法律・経済・心理・医学・数学
◆ 代表的な刊行物：『悪文』岩淵悦太郎編著 1960／『こころの旅』神谷美恵子 1974／『入門マクロ経済学』中谷巌 1981／『伊藤真の入門シリーズ』伊藤真 1997／『子育てのツボ』水谷修 2010／『マンガでわかる統合失調症』中村ユキ 2011／『ミクロ経済学の力』神取道宏 2014

質にこだわり続ける出版を

白水社

◆ 創業：1915年
◆ 主な出版ジャンル：哲学・歴史・文学・芸術・語学
◆ 代表的な刊行物：『ライ麦畑でつかまえて』サリンジャー 1979／『エセー』(全7巻) モンテーニュ 2005～16／『第二次世界大戦』(全3巻) ビーヴァー 2015／『メルロ＝ポンティ哲学者事典』(全3巻＋別巻1) メルロ＝ポンティ 2017

学びながら働き、働きながら学ぶ人々のために

平凡社

◆ 創業：1914年
◆ 主な出版ジャンル：事典・図鑑・人文・自然科学・芸術
◆ 代表的な刊行物：『大辞典』（全26巻）1934／白川静『字統』1984『字訓』1987、『字通』1996／『日本歴史地名体系』（全50巻）1979～2005／『改訂新版 世界大百科事典』（全34巻）2007／『改訂新版 日本の野生植物』（全5巻）2015～17

《書物による大学》を目指して

法政大学出版局

◆ 創業：1948年
◆ 主な出版ジャンル：哲学・思想・歴史・社会・芸術他
◆ 代表的な刊行物：『ヒロシマ』ジョン・ハーシー 1949 小局処女出版。史上初の原爆被災記録／『叢書・ウニベルシタス』1967～ 刊行1,000点を迎える《書物による大学》シリーズ／『ものと人間の文化史』1968～「ものでつづる現代百科全書」／『新版 古文書学入門』2003

ロングセラーをめざして

みすず書房

◆ 創業：1946年
◆ 主な出版ジャンル：人文科学・社会科学・自然科学・文学・芸術
◆ 代表的な刊行物：『ロマン・ロラン全集』1947刊行開始／『夜と霧』V. E.フランクル（霜山徳爾訳）1956／『現代史資料』1962刊行開始／『磁力と重力の発見』山本義隆 2003／『21世紀の資本』トマ・ピケティ 2014

京都の学術出版社

ミネルヴァ書房

◆ 創業：1948年
◆ 主な出版ジャンル：人文・社会科学・福祉・心理・教育
◆ 代表的な刊行物：『わらじ医者京日記』早川一光 1979／『小室直樹の世界』橋爪大三郎 2013／シリーズ『新しい発達と障害を考える本』／シリーズ『ミネルヴァ日本評伝選』／シリーズ『古田武彦・古代史コレクション』

この時代に固有の、生き残るべき価値を創り出す

未來社

◆ 創業：1951年
◆ 主な出版ジャンル：哲学・歴史・社会・文学・芸術
◆ 代表的な刊行物：『夕鶴』木下順二 1951／『現代政治の思想と行動』丸山眞男 1956／『忘れられた日本人』宮本常一 1960／『公共性の構造転換』ハーバーマス 1973／『俳優の仕事』全3冊 スタニスラフスキー 2008／『新版 日本の民話』（全79冊）2015～17／『加藤尚武著作集』（全15巻）2017～刊行中

魅力ある出版を目指して

吉川弘文館

◆ 創業：1857年
◆ 主な出版ジャンル：日本史・宗教史・考古学・民俗学
◆ 代表的な刊行物：『新訂増補 国史大系』（全66冊）1929～1964／『国史大辞典』（全17冊）1979～1997／『人物叢書』1958～刊行中／『歴史文化ライブラリー』1996～刊行中／『アジア・太平洋戦争辞典』2015／『ここまで変わった日本史教科書』高橋秀樹・三谷芳幸・村瀬信一 2016

人文図書目録のご案内

●人文図書目録刊行会発行　A5判・平均200頁　頒価本体（各）286円

◆哲学・思想図書総目録2018－2019年版

約2,100点（131社）収載。

〔掲載分野〕哲学・思想一般／倫理学・人生論／美学／日本の哲学・思想／アジアの哲学・思想／中近東・中南米・アフリカの哲学・思想／西洋哲学・思想／現代哲学・思想／宗教一般／宗教学／その他の宗教／哲学・思想関連雑誌

ISBN 978-4-915268-40-3

◆心理図書総目録2018－2019年版

約2,800点（96社）収載。

〔掲載分野〕心理総論／基礎心理／発達心理／教育心理／臨床心理／精神分析／精神医学／社会心理／その他の心理／心理関連雑誌

ISBN 978-4-915268-41-0

◆社会図書総目録2018－2019年版

約2,400点（118社）収載。

〔掲載分野〕社会一般／社会学理論／家族社会／地域社会／産業労働／福祉・教育／社会心理・マスコミ／社会問題／文化文明論／文化人類学／民俗学／神話・民話／社会関連雑誌

ISBN 978-4-915268-42-7

＊ご注文は書店にお願いいたします。

●人文会　〒113-0033　東京都文京区本郷2-20-7（みすず書房内）
●人文図書目録刊行会　〒162-8710　東京都新宿区東五軒町6-24（トーハンビル内）
TEL　03-3266-9521（事務局）

大月書店　筑摩書房

御茶の水書房　東京大学出版会

紀伊國屋書店　日本評論社

慶應義塾大学出版会　白水社

勁草書房　平凡社

春秋社　法政大学出版局

晶文社　みすず書房

誠信書房　ミネルヴァ書房

青土社　未來社

創元社　吉川弘文館

非売品

2018年9月1日発行
発行所　人文会
〒113-0033　東京都文京区本郷2-20-7　みすず書房内
編集協力　アジール・プロダクション
印刷　中央精版印刷株式会社